

1. はじめに

地球上に生息する生物は約 200 万種と言われている。もっとも、この 200 万との数字は「学名を持ち生物学的に正式に認知されている」生き物の種数にすぎない。実際には 1 千万とも 2 千万種とも言われる生物が地球には生息していると言われる。これは福井県でも同じ事で、我が県に一体何種の生物が生息しているか、との問いに誰もが正確な数字を示す事はできない。世界、県内を問わず、まだまだ未知の生き物が潜んでいるのである。

このように生き物に満ち溢れた地球であるが、約 6500 万年前の白亜紀の終わりに生物の大絶滅があった事は周知の事実だ。そして平成の現在もまた生物の大絶滅の時代である。改めて記すまでもないが、現下の生物絶滅の主たる原因は人間の文明活動である。

古き良き日本の農村の景観を今に伝える里山と太古そのままの荒波押し寄せる越前海岸。山と海両方の自然に恵まれた福井県と云えど、昨今の生物多様性の激しい衰亡とは無縁ではおられない。約 10 年前の福井県版レッドリストでは、県内の動物 371 種と維管束植物 458 種が絶滅種ないしは絶滅危惧種に指定されていた。しかし、今回の改定では動物種 533 種、維管束植物 731 種がレッドリストに挙げられた。単純に計算して、絶滅が心配される種の数がかつて 10 年で約 1.5 倍になった事になる。

この絶滅危惧種の増加の背景には県内生物種の調査が進んだがゆえの知見の蓄積との一面もあるが、第一義的には自然環境の悪化に他ならない。私自身、絶滅危惧種の野外調査で直面したのは里山、とりわけ陸水域の動植物の著しい減退である。具体的例を出すなら、湖沼や水田を住处とするガムシやゲンゴロウ類の個体数の減少ぶりが半端ではないのである。ため池の外観そのものは 10 年前と殆ど変わっていないと感じられるのに、そこに生息する水生昆虫類の数が急減している事実は、結局は生き物を育む里山の“体力”が絶対的に落ちている事を意味する。

もっとも悲観材料ばかりではない。日本海側に位置する他の府県版レッドデータブックと比較すると、福井県版ではより多くの種が絶滅危惧種として挙げられている事がわかる。これは福井県の自然環境が他地域と比べて特別悪化しているというわけではなく、希少種の調査が徹底して行われた結果である。県立の自然史博物館がなく、また県内の大学に理学部や農学部もない中、今回これだけ多くの絶滅危惧種を発掘できた事は誇りに思っており、関係者各位の尽力に深く敬意を表すところである。

言わずもがなの事であるが、レッドデータブック作成は出発点に過ぎない。市町や県の行政が主体となって県内の自然環境の保全を進めるのはもちろんだが、一人一人の県民ができる事もまた少なからずある。

県人口 80 万人の我が県が東京を目標にするのは全く無意味である。我々は“環境立県”で生きていくしかないという良い意味で諦観すればよい。郷土に愛着ある多くの県民の皆さまと一体となった自然回復活動の実現を切に願う。

平成 28 年 3 月

福井県レッドデータブック改定事業企画委員 保科 英人